

「働きつつ学ぶ」から「働きつつ教え学ぶ」へ  
大学で初めて講義をして思ったこと、考えたこと

高田好章

25年ぶりの母校は、正門の御影石も正面にあった丸い花壇もなくなり、高層建築が立ち並ぶコンクリートの城砦という感じになっていました。なつかしい教場を覗き、みんなで議論しあった研究会室には学生の姿は見当たりませんでした。たくさんの学生が校庭で団欒している姿を見ながら、ありし日と比べればなんと学生の表情は明るく、活気のある風景、お祭りのように若者が集まってくる場所のように思えました。

一昨年、学部・大学院時代にお世話になった阿部弘先生から手紙をもらい、母校の駒澤大学経済学部で講義をしてみないかとお誘いがありました。これまではただ勉強し、みんなと議論をし、発表するだけで、その成果を生かせる場に出ればと、お受けすることにしました。幸い勤務する会社の上司や職場の仲間の賛同と協力を得ることができ、昨年春から半年間週1日会社を休んで、東京まで出かけることになりました。

講座は「現代経済事情」、大学の先生ではなく、外部から講師を招いて開く講座です。「第一線で活躍する社会人講師：時の流れとともに変容を続ける経済は、言うなれば『生きもの』。こうした『生きた経済』を学べるよう、社会や経済の第一線で活躍する専門家・実務家による授業を充実させています」と学部の紹介にはあります。

講義のテーマは「日本の中小企業とアジア」と決められました。これは以前参加した本のタイトルを元につけられたものと想像します。私がやってみたいこととそれほどかけ離れてはいないし、勤める会社が中小企業であり、下請け企業として私の会社の活動を語れば、自然と講義のテーマに沿うことができるし、そこから広げて日本、アジアという視点を向ければ、内容の詰まったものになるのではないと思えました。また、私が携わっている、携わってきた仕事の話ですれば、聴いていただく学生にもいい刺激になるのでは。最初は貿易の仕事、その後営業に替わり、今は総務の仕事しています。小さな会社なので手が足りないときは、工場のラインにも立つことがあります。現在は会社の経理責任者なので、一つの会社の全体像が鳥瞰でき、日々お金の流れの中で経済というものを見えています。そんな仕事の話、そのとき考えたこと、思ったことを語るのもいいのではと。

どんな方法で講義をしたらいいのか、いろいろと考えてみました。マイクを持って、百人以上の学生に話すのです。まず、最初に思いついたのが、双方向の形にできないということです。それから、大学の先生には無い、実社会の経済活動に携わっている者として特色のある内容にすることに心掛けました。また、伝え聞いている学生の受講態度に対して、いかに興味をひきつけていくかが、要点ではないかと考えました。

最近私の会社でも商品開発が重点課題となり、開発部員、営業部員が2ヶ月に一回集まり、開発部員がプレゼンテーションをしています。それに参加していて、「そうだ、講義というのはプレゼンなのだ」と気づかされました。いかにわかりやすく、興味をひきつ

けるようにするには、ただしゃべるだけでなく、写真や表・図などを使ったほうがいい。京都橘大学の小森治夫さんからビデオを使った講義のやり方を教えていただき、そうだビデオも使おう。とにかくいろんなことを試してみよう。

毎回テーマを考え、それをもとに表や図、写真などをパソコンにいれて、プレゼン用ソフトの準備をする。教場はプロジェクターが使えて、パソコン画面がそのまま映し出される教場にしてもらいました。それと同時にその日の講義内容をA4一枚したレジュメをつくり学生に配りました。毎回のテーマは以下の通り。

- ・ 自己紹介、わたしの会社紹介
- ・ 日本の海外投資の歩み 1970年代から
- ・ 中小企業の国際化の事例をみる、自転車工業
- ・ 繊維産業の海外移転を考える
- ・ 電子部品産業の海外生産を考える
- ・ 自動車部品産業のアジア展開をみる
- ・ 中国進出企業マブチモーターをみる
- ・ 百円ショップをみる（略称；百均）
- ・ 製造業への人材派遣・業務請負を考える
- ・ 女性労働を考える
- ・ 成果主義賃金制度を考える
- ・ 中小企業のこれからを考える

講義の進行は、最初に前回の講義分のアンケート中であつた質問に答え、ざっと復習して、それから今回のテーマに入りました。後半はビデオを流しました。ビデオは毎日、新聞のテレビ欄を見ながら、興味のあるものを取りためておいて、関連あるものを選び編集し20分ぐらい短縮して写しました。主にテレビ東京の「ワールドビジネスサテライト」、NHKの「クローズアップ現代」「NHKスペシャル」などです。その内容は以下の通りです。

- ・ 私の会社：日進化学和歌山工場の生産ライン（これは私が撮ったもの）
- ・ アジア経済戦争：韓流、中国制覇の野望
- ・ アジア経済戦争：スーパー成都の戦い
- ・ アジア経済戦争：ソフト大国インドが日本を狙う
- ・ アジア経済戦争：液晶市場の覇権を握れ
- ・ アジア経済戦争：家電戦争アジアに賭ける
- ・ 中野鉄工所：自転車空気ハブ
- ・ 日本を買う中国：名門高級印刷機メーカー買収
- ・ フリーター417万人の衝撃
- ・ 熟練技能がきえてゆく
- ・ 地場産業復活なるか？～メガネ産地の新潮流～

この中の中野鉄工所の放送は早朝にあり、ビデオとりに失敗しましたが、たまたまその会社が私の勤める会社の近くだったので、直接その会社を訪れ、社長さんにお会いし、放送のビデオを借りました。ただ、ビデオを講義に使う際に注意しないといけないと思ったのは、アンケートを読むとマスコミの語った一方的な印象に左右されているな、ということです。講義中にもビデオやマスコミはある側面しか写していないことに注意を促していましたが。それでも、ただしゃべっただけと比べて、ビデオを見せるほうが学生には問題に対して興味を持ってもらえたと思います。それにしても便利なもの、ビデオも予めパソコンの中に取り込んでおき、パワーポイントでパソコン画面を写しながら、途中でクリックするだけでビデオ再生ができます。

毎回の講義に学生からアンケートを取りました。内容は、当日の講義の内容に関する事項と感想・要望の質問項目です。それを帰りの新幹線の中で読むのが楽しみ。赤ボールペンを持ちながら、回答やら感想などをアンケートに書き込みました。意外だったのは、授業中の態度からは想像もできないような、アンケートの質問に真面目に答えてくれたこと。講義中にいろいろ問いかけてもさっぱり反応がないのには、さみしい感じがしましたが、アンケートにはいろいろな正直に書いてくれていました。見かけで判断してはいけない。中には励ましの言葉や、「最高」なんて喜ばしてくれるものまで。私とそのアンケートをどのように読み、感じたかを知って欲しく、自ら書いたことが彼らの記念になればとの思いから、集めたアンケートはそれぞれの学生に提出されたレポートと共に返しました。

教場の後ろのドアは開けてあり、出入り自由。つまらなければ、出て行ってもいいし、興味があれば聴いてくれればいいということにしました。思ったほど私語はありませんでした。一日に昼と夜に2回講義をしましたが、昼より一度しゃべった夜の方がまとまりのつく話し方が出来、時間配分もうまくできました。出席はとりませんでした。アンケートの名前をチェックすれば、自ずとわかる仕組み。

評価は試験をせずにレポート提出のみにしました。予め締め切りの1ヶ月前に課題を知らせ、締切日の翌週には本人に評価点と感想、どうすれば良くなるか、いいところなどを書いたものをつけて返しました。学生には、もしその評価点に不満であるならもう一度レポートを出してもいいと告げましたところ、何人かの学生が挑戦してくれました。中には評価についてどうしても納得できないということで、何度かメールでやり取りし、再度レポートを提出するというつわものもいました。また反対に、アンケートに一度も名前がない、つまり一度も出席していない学生がレポートを出してくるつわものも。

学生からは、提出したレポートが返してもらえたことに、驚きの声がアンケートに書かれていました。これまで書いたレポートがどうなっていたのか、どう採点されたのか、わからなかった、と。私の学生時代は、提出したレポートに指導の先生は赤鉛筆で感想・書き込みなどがされて返された思い出があり、現に今回お誘いをしてくれた先生も今もやっているとのこと。

レポートの締め切りにした6月30日は、京都駅から時間通りに新幹線に乗ったものの、

乗る前から何か変な雰囲気、とうとう名古屋駅のホームで動かなくなりました。静岡県地方で豪雨があり、復旧のメドはたちません、との車内放送。レポート締切・回収日なので、どうしても行きたかったですが、3時間以上停まったままでとうとう間に合わなくなり、電話で休講とレポートの回収を依頼して、近鉄特急で帰ってきました。帰りの電車から見た空には青空に白い雲が浮かんでいました。数日遅れ郵送で届いたレポートの山に土・日の休みを使い、徹夜しながら読んで添削し、感想と採点を書いた表紙をつけて、翌週の講義で返しました。我ながら、よくがんばったなと思いました。

ただ、学生のレポートについて、数人だけがいいもので、内容にがっかりするものが大部分でした。レポートの書き方がわかっていない、ということです。単なる読書感想文風であったり、明らかにどこかの文書をもってきたものであったり、基本的なレポート、論文の書き方を知らないということです。私達の時代は、いろいろな人の論文を読んで自然と基本的な書き方を学びましたが、今の学生は読む機会などないのでしょうか、それとも、そんな意識なく論文を読んでいるということでしょうか。あまりにひどいので、レポートを返した時に、書き方や調べ方・まとめ方など、私がやっているいろいろなやり方を紹介し、どうすればいいレポートが書けるか、黒板で書きながら説明したところ、その日のアンケートには、もっと早く最初に教えてほしかった、との言葉をもらいました。その通りで、学生の力を過信していたようです。

毎回の講義の始まりに何か興味を持てるものと思い、行きに新幹線で静岡を通るときに富士山を望むことができるので、毎回「今日の富士山」と題して、その日の富士山を車窓からデジカメで取り、その日の講義で画面に写しました。何人かの学生がアンケートで楽しみにしていると書いてもらえ、富士山付近になると今日はどう撮れるかと気を使いました。ですから、座る席は山側。回を重ねるごとにどこでカメラを取り出し、どこでシャッターを押すか、決まってきました。ただ、4月・5月はどうにか姿をとることが出来ましたが、6月に入ると姿を現わず、雲か霞の中にあり、白い画面だけを写してここにあるはずと赤字で示す画面となってしまいました。

また、せっかく奈良から来ているのだからと、それまで撮っていた奈良のお寺の塔などを映して、好評なのを真に受けて、奈良や大阪などの名所、大阪城や中之島公会堂まで撮りに出かけ、それにまつわる逸話を紹介したりするコーナーも設け、講義への導入部分としました。

最初の講義では私の会社の紹介をし、エアゾール・化粧品を作っているの、商品サンプルを沢山持っていき、終わったあとは学生にあげました。また、百円ショップでの回には、実際に百円ショップにいった買った湯飲みを使い、隠れて撮った店内の様子を映しました。マブチモーターの回では、模型屋で買ったモーターを使いました。ほんものの手形を見せるなど、できるだけ実感できるように工夫をしてみました。

学生からのアンケートに、毎回講義で映し出す表や図が欲しいと要望がありました。しかし自由にプリントできる枚数は限られているため、沢山の学生に配ることはできません。

そのためにその日に使ったプレゼンの内容を、そのまま私のホームページに載せて公開することにしました。ありがたいことに、パワーポイントだと一気にホームページに変換できます。講義で使ったレジュメとスライドの内容をそのまま掲載して、いつでも学生が講義内容を見る事が出来るようにしました。学生には復習することが出来るし、欠席した学生にも良かったようで、またレポートを書いてもらうときの参考にもなったとのこと。早口の講義で次々と図表がでてきて、ゆっくり図表をながめたいという要望にもこたえることができました。また、私の会社の仲間や取引ある銀行の人などにもこの話をしたところ、興味を持ってホームページを見てくれました。

講義で扱った成果主義賃金では私の会社の人事評価を見せましたが、学生を評価するだけでなく、私の講義に対する評価を学生にしてもらおうと、アンケートとは別に、最後の講義の時に受講者全員にその場で様々な項目の評価をしてもらいました。評価項目は、「テーマの選択」、「ビデオの選択」、「スライドの内容」、「レジュメの内容」、「アンケートの内容」、「講義のわかりやすさ」、「説明のしかた」、「講義の速さ」、「しゃべりの速さ」、「声の大きさ」、「提出レポートへの私の評価」、「提出レポートへの私の感想」で、匿名でもいいとしたのですが、意外と記名で皆さん好意的に評価してくれました。ただ予想通り、「講義の速さ」、「しゃべりの速さ」は良い評価はもらえませんでした。

講義のための準備を半年前から始めましたが、実際にどんな姿になるのかわからず、なかなかまとまりがつかせませんでした。とにかく、初回は私の会社の話から始め、大まかなテーマだけは決めて、講義が始まってからは、毎週休みの土曜・日曜に、集めた材料を整理し、レジュメを作り、プレゼンを用意し、ビデオを作製し、前日までにやっと完成し、水曜日に講義する。帰りが深夜になるので、翌日以降は眠い目のまま、2日間仕事。仕事をしながらの毎週の講義準備は、一週間がびっしり詰まっているようで、これまでで、一番勉強した日々でした。

講義に出かけるときは、いつも京都駅で新聞を買い、新幹線の車内で読むのが慣例となっていました。早朝の新幹線はビジネスマンが多い。ところがその日は私が買った日経新聞の見出しが周りの人と違うことに気がつきました。最後の講義の日7月14日、その日はたまたま自宅近くの駅で新聞を買いました。車内の回りの同じ日経新聞のトップに「UFJ、東京三菱と統合へ」とあります。これは大変、私の会社の取引銀行はUFJ。早速品川駅のキヨスクで日経新聞を買い求めましたが、どのスタンドでも日経新聞だけからっぽ。やっと人通りのすくない隅っここの売店にありゲット。その日の講義の最初に同じ日の違う見出しの新聞を取り上げて話をしました。それにしても、新聞の早版と遅版の違い、特ダネを実感した日でありました。

日頃机に座って仕事をしてはいますが、教えるときは立ちっぱなし、さらに大学は思った以上に広い。あちらこちらと用事で歩くと本当に足が棒のようになってしまった。いやいやそれなりに肉体労働でもあることを実感しました。

1時間半の講義は、やる前はそんなに長くどんな話をしようかと思いましたが、やって

みると時間が足らなくなり、用意した材料の半分も消化できていない、なんとも短く感じられて、早くも時間切れになってしまいました。夢中になってやっているだけで、学生にはどう伝わったのか、こちらが思うばかりで空振りに終わらなかったか。アンケートを見る限り、いくらかはこちらの熱意が伝わったかな、と思っています。最後の評価アンケートには、「この講義は毎時間が非常に充実していて、とてもためになりました。もっと先生の講義をうけたかったです。本当にこの科目を履修してよかったです」、「毎回テーマが設定されていて、それに関するビデオを流すという講義スタイルは勉強しやすかった。ひたすら板書をする授業よりも理解できたと思う。また毎回提出するアンケートでも、質問に丁寧にこたえていただき、嬉しかったです。また、受けたいと思える講義でした」、「提出したレポートを返却するところは他の授業と違い刺激になった。正直に言うと辛口な評価かなと感じた部分もあったが、逆にそれが今後の自分にとってプラスになればいいと思った」、「半期という短い期間ではありましたが、非常に中身の濃い、楽しく分かりやすい講義でした。中小企業の役員としての中小企業の現状、アジアとの関係の分析は大学教授の講義ではなされにくい点であり、斬新でした。またどこかで高田先生のお話を拝聴したいと思います」と、なんともうれしいことを書いてくれました。講義中は反応のない学生を前にして、なんとか当初考えた双方向の講義はなんとかできたように思います。ただ、ある学生は、「授業というものを持たれた経験が少ないからしかたないのですが、関西で通用すれば必ずしも関東で通用するわけではありません。先生はお一人で授業を次から次へと進んで行き、レジュメさえあれば私達学生にノートを書かせないようではあまりにも授業としては雑すぎます。もう少しおちついて話をし、板書もするようにするともっとおもしろい授業になると思います」と書いていて、私の一番痛いところをつかれたなど、これは大いに反省しています。

教えられる立場と教える立場はこれほど違うのかと、思いました。学生時代は、講義は適当に聴いていましたし、面白くなければ出る気にもならない。それが教える立場になってみると、その準備の手間、講義中の緊張感を考えると、なんとこれまでとは先生に失礼な態度であったなど、今頃気がついた次第です。母校に毎週通うことになり、学部・大学院時代の同級生達と本当に久しぶりに会うことができ、諸先生方にもなつかしくお会いし、お話する機会を持つことができました。

その日の講義が終わって、品川駅から最終の新幹線に乗り、京都駅から自宅近くの駅に最終電車で着けば午前零時を回っていて、いつも妻に車で出迎えてもらい、感謝。基礎研大阪第三学科のゼミの人達にも、水曜日が講義日と重なり、その期間だけ曜日を変えていただきました。また、会社の人達も快く送り出してくださいました。沢山の人の世話になりました。基礎研の皆様をはじめ様々な人から教えを受け、それを生かす機会を持つことができました。この経験が何かの形にお世話になった人たちにお返しできると思っています。もう一年、講義をすることになっています。次回もいろいろ工夫をこらしながら講義をしたいと思っています。

「働きつつ学ぶ」から「働きつつ教え学ぶ」への半年間でしたが、やはり「教えること」は「学ぶ」ことの一つの姿だと実感させられました。「働きつつ学ぶ」、この言葉の持つ意味を今後も深く噛み締め、実践の日々は続きます。

注) 講義内容の載ったホームページは <http://user.komazawa.com/~ytakada/kougi/>

(たかだよしあき 所員 化学会社勤務)